

修士論文（要旨）

2012年1月

取り出し授業における日本語学習に関する一考察
—ある都立定時制高等学校外国人生徒の事例から—

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

210J3015

福島千花

目次

序章 はじめに

0. 研究背景

0.1 定時制高等学校について

0.2 本研究における「外国人生徒」の定義

第1章 先行研究

1.1 梶田他（1997）による外国人児童生徒への教育的対応

1.2 志水・清水（2001）の外国人児童生徒の教育的対応

1.3 高等学校の外国人生徒教育

1.4 先行研究のまとめと本稿の立場

1.5 研究目的

第2章 調査概要

2.1 都立 A 定時制高等学校の教員と講師の概要

2.2 都立 A 定時制高等学校の外国人生徒の概要

2.3 日本語取り出し授業の概要

2.4 調査対象者

2.5 調査方法

第3章 外国人生徒の調査結果・分析

3.1 アンケート調査の結果と分析

3.2 インタビューの結果と分析

3.3 参与観察の結果と分析

第4章 教員と非常勤稿の調査結果と分析

4.1 教員アンケート調査の結果と分析

4.2 日本語取り出し授業担当の非常勤講師アンケート調査の結果と分析

4.3 理科の取り出し授業担当の非常勤講師インタビューの結果と分析

第5章 総合的考察

5.1 取り出し授業における日本語学習の必要性と在り方

5.2 高等学校の取り出し授業における連携

5.3 まとめ

5.4 今後の課題

注

参考文献

参考サイト

資料

要旨

近年、日本の公立学校に在籍する外国人生徒の存在が顕著になっている。特に、2008年のリーマンショック以来、公立高等学校に進学、編入する外国人生徒は増加傾向にある。増加傾向にある外国人生徒に対応するために、文部科学省では日本語指導が必要な外国時人児童生徒のための特別措置を行っている。高等学校入学試験においても、ルビ振りや時間延長などの措置が取られ、外国人生徒は入学試験という狭き門をくぐり抜け、高等学校へ進学する。

これまでの外国人生徒の研究は、年少者、いわゆる義務教育段階の生徒に関するものが多い。高等学校進学後の研究はあまりなされていない。義務教育ではない高等学校は、フィールドとして参入することが困難であり、定時制という学校の特殊性からも、高等学校における外国人生徒の日本語学習に関する研究はあまり進んでいないと考えられる。先行研究では、高等学校における外国人生徒に対する課題として、(1) 高等学校進学と中退に対する課題、(2) 押し付けの適応ではない異文化交流の在り方、(3) 教科指導において日本語ができないことが明らかとなった。しかし、実際の現場からの調査は少ない。

稿者は2010年度から都立A定時制高等学校で、外国人生徒に対する取り出し授業の非常勤講師をしている。そこで本研究では、実際の現場からの定時制高等学校在籍の外国人生徒の課題を、都立A定時制高等学校の外国人生徒を事例として明らかにし、(1) 高等学校の取り出し授業における日本語学習の必要性と、(2) 高等学校の取り出し授業における連携について考察する。そして、都立定時制高等学校における日本語指導に有用な提案をすることを、本研究の目的とする。

本研究の調査は、都立A定時制高等学校を実践校として行った。調査対象は、稿者が授業実践を行っているクラスの生徒11名及び、実践校の教員2名と日本語取り出し授業担当の非常勤講師5名である。調査方法は、(1) アンケート調査、(2) インタビュー、(3) 参与観察を用いて、データを収集した。録音に対する抵抗感が多少見られたインタビューの際には、インタビューノーツとして記録した。調査の結果は、箕浦(2009)のフィールドノーツの分析方法を参考に、コーディングを行い、小見出しをつけることで分析概念を抽出した。

外国人生徒3名に行ったアンケート調査からは、日本語の上達に役立つリソースとして、「友だちとの会話」と「日本の音楽を聞くこと」が使用されていることが明らかとなり、教室外において、学習者は言語の社会科をしていることがわかった。外国人生徒5名に対して行ったインタビューは、箕浦(2009)を参考にコーディングを行い、「日本語の取り出し授業の必要性」、「必要な日本語能力」、「難しい教科」、「やさしい教科」、「進路」という分析概念を抽出した。

都立A高等学校の日本語取り出し授業担当の非常勤講師として参与観察を行った結果からは、

(1) 友人関係の構築、(2) 日本語取り出し授業における学習意欲、(3) 理科の取り出し授業に見られる学習意欲の後退、(4) 学習方法の変化と動機づけ、(5) クラス内の友人関係と学習態度の変化、(6) 日本語指導から教科指導へ、(7) 教科学習から見た日本語能力の課題(世界史)、(8) 教科学習から見た日本語能力の課題(国語)という分析概念を抽出することができた。

実践校の教員 2 名のアンケート調査の結果から、教科では、「文章を読むこと」から、日本語の理解が外国人生徒にとっては困難であると感じていることが明らかになった。非常勤講師アンケート調査の結果からは、(1) 取り出し授業の内容、(2) 日本語指導で目指すこと、(3) 評価について、(4) 外国人生徒の取り出し授業に関する意見が抽出された。また、非常勤講師インタビューの結果からは、(1) 外国人生徒に対する理科の取り出し授業の試み、(2) 取り出し授業を通して見えた問題点、(3) 外国人生徒の学習意欲と学習環境、(4) 取り出し授業の評価についての 4 つの分析概念を抽出した。

第 3 章と第 4 章から、都立 A 定時制高等学校における日本語取り出し授業の課題として、(1) 取り出し授業における学習意欲の差と後退、(2) 教科学習を支える日本語学習がされていないこと、(3) 取り出し授業に対する評価の問題、(4) 教員と日本語取り出し授業担当の非常勤講師の連携がなされていないことが明らかになった。

教科学習への円滑な移行もしくは、教科学習への抵抗感を緩和する緩衝材の役割としても、取り出し授業は必要である。日本語学習の在り方としては、生徒のニーズや、彼らを取り巻く状況の変化に対応する柔軟性を持つことが重要である。

都立 A 定時制高等学校では、情報共有という意味で「連携」ができていない状況である。しかし、円滑でより質の高い日本語指導を行うためには、日本語取り出し授業担当の非常勤講師の間に「情報共有」のための連携は必要である。非常勤講師は勤務する曜日だけに来るということマイナス面として捉えるだけではなく、そのマイナス面を補うような「情報共有」の連携システムを考えるべきである。

本研究で明らかとなった都立 A 定時制高等学校が抱える課題と考察を踏まえ、高校側へ (1) 長期的視野に立った日本語学習の必要性、(2) 外国人生徒の居場所づくり、(3) 外国人生徒のニーズと学校側のニーズを知るという 3 つの提案をする。高等学校は生徒が卒業後に社会参加ができるように教育する義務があると思われる。卒業後のことを踏まえて、外国人生徒に対しても長期的視野に立った日本語学習が必要である。高等学校という社会に参加を果たした外国人生徒は、友だちを通してそこに居場所を見つける。学校側が居場所を作り提供することも一つのきっかけとしては必要であるが、友だちを作り、自然に居場所を作れる環境と、支援が望まれる。外国人生徒と教員のニーズにはギャップがあると思われる。ギャップを知った上で、それを埋めていくような日本語指導を考え、取り出し授業を行うべきであると考え。

3.1 のアンケート調査と、3.2 のインタビュー結果から、授業外での外国人生徒の日本語学習のツールとして、Youtube やテレビ、携帯電話などのメディアが使用されていることが分かった。しかし、本研究では、携帯電話などのメディアが、外国人生徒の日本語学習において有効な役割を果たしていることを証明するまでには至らなかった。また、実践授業においてメディアを使用した授業を行わなかったため、日本語学習におけるメディアの有効性についても検証することができなかった。日本語学習におけるメディアの有効性について調査し、授業に活用していきたい。

今回の研究では、インタビューデータが不足していたので、インタビューをとり、参与観察やアンケートにもつなげていく研究方法を取ることを課題とする。

参考文献

- 乾美紀 (2008) 「高校進学と入試」『高校を生きる大阪府立高校にみる教育支援』明石書店 pp.29-43
- 太田晴雄 (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院
- 梶田正巳・松本一子・加賀澤泰明 (1997) 『外国人児童・生徒と共に学ぶ学校づくり』ナカニシヤ出版
- カミンズ・ジム (2011) 『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
- 川上郁雄 (2005) 「高校レベルの JSL 生徒の日本語教育を考える」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』19号 早稲田大学日本語教育研究センター pp.13-31
- 児島明 (2006) 『ニューカマーの子どもと学校文化 日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ』勁草書房
- 齊藤ひろみ (2011) 『外国人児童生徒のための支援ガイドブック～子どもたちのライフコースによりそって～』凡人社
- 志水宏吉 (2008) 「ニューカマーと日本の学校」『高校を生きるニューカマー 大阪府立高校にみる教育支援』明石書店 pp.12-28
- 志水宏吉・清水睦美 (2001) 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店
- 新保真紀子 (2008) 「高校進学と入試」『校内サポート体制』明石書店 pp.90-102
- 新矢麻紀子 (2008) 「府立高校における日本語教育支援」『高校を生きるニューカマー 大阪府立高校にみる教育支援』明石書店 pp.103-116.
- 瀬川正仁 (2009) 『若者たち：夜間定時制高校から見えるニッポン』バジリコ
- 高野好美 (2001) 『実践報告 高等学校「国語科」における外国人生徒を核にした学習活動の試み—教科書教材から多言語情報紙を用いた活動へ』中国帰国者定着促進センター紀要
- 趙衛国 (2010) 『中国系ニューカマー高校生の異文化適応—文化的アイデンティティの形成との関連から—』御茶の水書房
- 中島和子 (訳著) (2011) 「序章 カミンズ教育理論と日本の年少者言語教育」『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会 pp.13-59.
- 中西晃・佐藤郡衛 (1995) 『外国人児童・生徒への取り組み—学校共生の道—』教育出版
- バトラー後藤裕子 (2011) 『学習言語とは何か 教科学習に必要な言語能力』三省堂
- 真鍋眞澄 (2009) 「フィールドでダブルロールを担うとき—ニューカマーの子どもの文化的アイデンティティ研究から—」『フィールドワークの技法と実際Ⅱ—分析・解釈編—』ミネルヴァ書房 pp.91-109
- 宮島喬 (2002) 「就学とその挫折における文化資本と動機付けの問題」宮島喬・加納弘勝 (編) 『国際社会 2 変容する日本社会と文化』東京大学出版会 pp.119-144
- 箕浦康子 (2009) 『フィールドワークの技法と実際Ⅱ—分析・解釈編—』ミネルヴァ書房